

ブラジル北東部における「男らしさ」の否定的編成と公表空間の変容

The negative articulation of masculinity and the changing social space of discourses
in the Northeast of Brazil

高橋 慶介

TAKAHASHI Keisuke

I 序論

カルナヴァルに向けて気温も人々も熱くなる2011年の年の瀬に、ブラジル国北東部バイア(Bahia)州サルヴァドル(Salvador)市で、男性たちが角をモチーフにした帽子をかぶって練り歩く様子が地元紙に掲載された。「コルノ(corno)」を自称する男性たちである。彼らは、コルノ、つまり「妻や恋人に不貞を働かれた男性」に対して、偏見や差別のない社会を要求しているという。

『マッサ』の記事によれば、二回目となるデモ行進は、「コルノ・クラブ」のメンバーによって実施されている[Massa! 2011]。記事には、参加者のコメントが掲載されている。

コルノになることは問題ではない。近所の奴らはそう言ってるよ。このフェスタは素晴らしい。14歳からコルノだが、そんな私でもお祝い事はたくさんあるんだ

人生で何度もコルノになってきたよ。この素晴らしいフェスタに参加するのは2回目になるね。こんなデモ行進は見たこともないが、隊列もなければ混乱もない。ここは平穩にやっているよ

参加者は新年を迎える雰囲気の中で練り歩きの賑わいを楽しんでおり、デモ行進自体に大きな政治的意義があるようには思えない。実際、女性参加者の一人は、「こんな冗談は好きよ」とコメントしている。

それにしても、なぜコルノたちのデモ行進が、大衆紙の記事として取り上げられるほどの出来事なのか。そこには、ここバイアに留まらず、ブラジルにおいて、コルノが「男らしさ」とは正反対の代表的な具体像であるがゆえに、その事実を自ら公表することなど、かつては困難であった状況がある。コルノは、男性の恥ずべきあり方として、嘲笑や罵りの対象となってきたのであり、ひっそりと隠すべき事実であった。デモ行進では、それが今や公然と打ち明けられているのだ。

本論は、2003年以来、筆者がフィールドワークを行ってきたバイアでの調査に基づき、このコルノを通して、ブラジルにおける「男らしさ」のあり方を描き出しつつ、その変容について再考するものである。まず、フィールドワークでのデータを通して、「男らしさ」それ自体の編成のあり方を、男性たちの間で語られるコルノに注目しながら記述する。その上で、一見すると、「男らしさ」の変容が生じているように見えるものの、実際には、それ自体ではなく、否定的男性像を拒否したり、公表したりする社会空間の変容であることを、歴史研究によって補完しつつ明らかにしたい。こうした作業において、本稿を貫く姿勢は、

「男らしさ」が変容する中で、何が変容しないのかを見失うことなく記述することである。なお、「男らしさ」を考察するにあたって、本論は、Jacques Lacan に影響を受けた精神分析学派の議論を参照してゆくことを断っておく。

II フィールドの概要

バイアは、9 州で構成されるブラジル北東部最大かつその 3 分の 1 の面積を占める州である。1,500 万人を超える人口は、サンパウロ、ミナスジェライス、リオデジャネイロに次いで多い。高温の熱帯に属しており、生態系は、海岸沿いの森林地帯であるゾナ・ダ・マッタ(zona da mata)、内陸の乾燥地帯であるセルタオン(sertão)、両者の間の移行地帯であるアグレスチ(agreste)の三つに分かれる。大西洋沿いに位置する州都サルヴァドルは、300 万人近くを抱える大都市で、例年、ブラジルでも最大規模のカルナヴァルが開催されている。筆者のフィールドワークは、半島状のサルヴァドルと、そこから内陸に入った一帯、ヘコンカヴォ(recôncavo) 地方を中心に実施されてきた。

北東部は、ポルトガルがブラジルを植民地化した初期段階に入植を開始した地域であり、その歴史はバイアとともに 16 世紀に遡る。ポルトガル王朝は、スペインとの間で合意したトルデシヤス条約に基づいて領有権を得た新大陸の領土を、1534 年から 1536 年にかけて 15 のカピタニア(capitania)へと緯線に沿って分割し、世襲財産として 12 人のドナタリオ(donatário)に分与した。1549 年には各カピタニアを総督する首都がバイアの半島に建設され、「救世主(サルヴァドル)」の名を冠した首都は、約 200 年にわたって、カピタニアの間を、そして貿易によってブラジルと世界の間を結ぶ要の都市となった。

植民地期ブラジルにおける主要港としての歴史は、バイアに一つの特徴をもたらしている。それは、ブラジルの中でも、アフリカの影響が色濃いということである。植民地期に、アフリカから新大陸へは約 1,000 万人、その 3 分の 1 がブラジルに連行されている。サルヴァドルは、ブラジルを目的地とした奴隷貿易において最も多くの奴隷を受け入れ、その数は 120 万人に上ると推計されている¹。その結果、今日の人種構成を見ると、政府の統計調査に対して、人口の 17.1%が自らを「黒人(preto)」と回答しており、黒人の割合は全国平均の 7.6%を大きく上回る[IBGE 2010]。人種に加えて、文化もアフリカの影響抜きには語れない。脚を宙で舞わせ、ダンスと格闘技の要素をあわせもつカポエイラ(capoeira)は、手が不自由であった奴隷たちの抵抗実践であったと語られてきた。西アフリカの精霊信仰に起源をもつカンドンブレ(candomblé)は、カトリック聖人に精霊を重ね合わせることで(シンクレティズム)、アフリカ伝統を絶やすことなく今日まで保持してきたと言われている。

経済的には、バイアは、国内最貧州の一つである。ブラジル連邦政府戦略室(Secretaria de Assuntos Estratégicos de Presidência da República)によれば、確かに、人口の半分が今や「新中間層(nova classe média)」を形成するに至り、貧困線以下にいたブラジルの人口は、2003 年の 40%から 2009 年の 24%へと激減している。しかし、バイアが、相対的に貧困であることに変わりはない。IBGE が 2008 年に公表した州別の月収平均(単位はレアル)を見れば、上位から、ブラジリア(2,117)、サンパウロ(1,290)、リオデジャネイロ(1,223)、サンタカタリナ(1,221)、リオグランデドスル(1,132)と、首都と南部の州である。一方、下位の 5 州は、ピアウイ(586)、セアラ(618)、マラニョン(652)、バイア(700)、ペルナンブコ(703)の順と

なっている。いずれも北東部の州であり、しばしば干ばつが起きる自然環境や奴隷制時代に遡る社会階層の影響もあって、はっきりと南北格差を示している[IBGE 2008]。

ここバイアにおいて、本稿が注目する「妻や恋人女性に不貞を働かれた男性」をめぐる語りは、古くから日常的な会話で見られるものである。例えば、ブラジルを代表する小説家、Jorge Amado の『Terras do sem fim (邦題: 果てなき大地)』を見てみたい。同著は、20 世紀前半の州南部を舞台としてカカオ栽培に適した土地の争奪を扱った作品である。タバーカスという集落を描いた次のくだりで、同地で「最も使い古された冷やかし (pilhéria mais gasta)」と Amado が呼ぶ言い回しが見られる[Amado 1943: 141]。

荷馬車の隊列を引き連れたろば追いが、集落の小道を日夜に渡って往来している。ろば追いは、ろばが言うことを聞かないので進路を思い通りに向けることができていない。その様子を見て、集落に住む一人の男性が、家の戸口からろば追いに呼びかける。「おい元気かい、ろば追いの奥さん (mulher de tropeiro) よ。」ろばをうまくコントロールできないろば追いは、男性ではないものとして冷かしを受ける。それに対して、ろば追いは次のように返答する。「今からちよっくらお前のかあちゃんと会ってきてやるよ。」こうして、父親とは別の男性 (ろば追い) に寝取られるような、性的にふしだらな存在へと母親を貶めることで、冷やかした男性にやり返している。

ラテンアメリカは、男性優位主義、いわゆる「マチスモ」が強力に根付いた文化圏である、としばしば言われてきた。このマチスモを文字通り受け取ると、達成すべき「男らしさ」を具現化した確たる男性像があるように思えるかもしれない。しかし、実際には、この冷やかしのやり取りのように、様々な否定的男性像を通して「男らしさ」をめぐる行為モデルが辛うじて抽出できるのみで、実定的に男性像が形成されている訳ではない。次章では、今日のバイアをフィールドとして、より具体的かつ詳細に、「男らしさ」の構成のあり方について考察してみたい。

III コルノと「男らしさ」の空虚さ

1 罵り言葉における否定性の具体像

筆者のフィールドワークの経験は、マチスモという実体的な男性像とはまったく別の、「男らしさ」の編成論理に対する戸惑いの連続であった。「男らしさ」の覇権的中心の存在を主張する論者にとっては意外なことかもしれないが [ex. コンネル 1993: 268-269, ブラジルでは、Parker 1991: 34-35]、人々の語りは、「男らしさ」ではなく、その反対、つまり男性の否定的具体像をめぐる満ち溢れていたのである。では、それは何かと言えば、つまり、それは女性であると思うかもしれない。もちろん、男性の会話や身振りの対象から女性が消えることはなく、男性に対する具体像の一つであることは疑いない。

しかし、より頻繁かつ多様な形で現れる否定的具体像は、女性よりも、むしろ日常会話における他の男性に対する定型化的罵りの言葉に具現化されていた。定型句は三つに集約される。

第一に、「フィリオ・ダ・プッタ (filho da puta)」、つまり文字通り「娼婦の息子」を挙げることができる²。この娼婦 (プッタ) は、本来ならば夫や恋人がコントロールすべき性を自由に売買している。フィリオ・ダ・プッタは、最愛の母を娼婦扱いすることで、男性を間接的に辱める言葉である。同様の表現は、ポルトガ

ル語のみならず、西洋語圏において広く確認できるが、しばしば指摘されるとおり、ブラジル社会の特徴をカトリシズムが奨励する強固な情緒的繋がりや相互扶助に基づいた「家族主義」、さらには貧困層家族の特徴が「母親中心家族」であるとするならば、母親への侮辱はさらに効力を増幅させるだろう³。

第二の定型句は、総じてペニスを肛門で受け入れる「受動的男性同性愛者 (homem passivo)」⁴である。「ゲイ (gay)」や「同性愛男性 (homem homossexual)」が対等な同性愛関係を想定するのであれば、受動的男性同性愛者は、ペニスを挿入する側と非対称的な関係で結ばれており、そこには肛門性交においてコントロールを握る挿入する側との従属／支配関係が重ね合わされる [Parker 1991]⁵。「ヴィアド (viado)」、「ビシャ (bicha)」、「ボイオラ (boiola)」といった豊富な語彙には、発音がヴィアドに極めて近い「鹿 (veado)」やブラジルでポピュラーな動物賭博で鹿を示す数字の「24」、つまり「ヴィンチ・イ・クアトロ (vinte e quatro)」といった転義派生形、あるいはカンドンブレで使用され、西アフリカ語源とされる「アデ (adé)」や、女性の仕草を過剰に真似た身振りを連想させる「壊れた手 (mão quebrada)」といった当該地域で流通する独自語が加わり [高橋 2008]、その圧倒的な語彙数は、ある言葉が同性愛を示す言葉かどうかを判別するのに、ときにフィールドの人々でさえ当惑を見せていた⁶。

第三に、そして最も頻繁に耳にする罵りが、コルノである。コルノの原義は「角」であり、コルノから派生した「コルヌド (cornudo)」、同じく角を意味する「シフリ (chifre)」、シフリから派生した「シフルド (chifruado)」も不貞を働かれた男性を意味する。不貞を働いた女性は、「コルネテイラ (corneteira)」になる。コルノはまた、不貞を働かれた男性のみならず、不貞そのものも表す。女性を主語にして「コルノを与える (dar corno)」は、不貞を働くという表現になり、男性を主語にして「コルノをくらう (tomar corno)」と云えば、女性に不貞を働かれることだ。ただし、なぜ「角」が「不貞を働かれた男性」に転義したのかを説明する語りはフィールドにおいて確認できなかった⁷。

これら三つの罵りに共通するモチーフは、男性の対他関係を表す行為モデルの反転である⁸。いずれの罵り言葉でも、男性が「非男性」に対するコントロールを失っていたり、非男性がコントロールを握っていたりする。娼婦の息子においては、非男性である母親が性的なコントロールを握っている。受動的男性同性愛者は、他の男性にベッドの上でコントロールされている。コルノは、妻もしくは恋人をコントロールできずに他の男性に寝取られている⁹。これらを再反転させてみると、「男性は他者 (非男性) をコントロールする」という行為モデルがかすかに浮かび上がる。

このように、「男らしさ」は、同一化すべきマチスモのような実定的な中心など最初から伴うことなく、否定的具体像を自己以外の他の男性に帰属させる呼びかけを通して存在する。それは、パイアでは受け答えの状況でも一貫している。罵りは通常、平然と受け流されるが、それに対して返答する場合は、方言である「ラ・エリ (lá ele!)」、つまり、字義通り訳せば、「彼方 (lá) にいる彼 (ele)」と言って軽く否定する。その意味は、「他の誰かさんはコルノだが、俺は違う」となる。

ゆえに、罵り言葉をめぐる「男らしさ」には、男性の主体、希求すべき性的アイデンティティ、その両者が結びつく場や状況を貫通する一点などない。このような「男らしさ」の編成のあり方は、Jacques Lacan に影響を受けた精神分析学派の有名なテーゼに倣って、「中心を欠いた空虚な場所」と言えるだろう [クリステヴァ 1986: 27, ジジエク 1996: 304-309]。Don Kulick は、サルヴァドルに住む男性異装束者、「トランスチ (travesti)」についてのフィールドワークから、「男性対女性」に対する「男性対非男性

(not-man)」という男性視点のジェンダー構成を導き出した[Kulick 1998]。本稿の「中心を欠いた空虚な場所」としての「男らしさ」のあり方もまた、彼のテーゼと共鳴する。

従来、これらの罵りが注目される時、同性愛者や女性を劣等な存在に貶めると同時に、「男らしさ」の礼賛を伴うゆえに、男性優位主義に立脚する性差別を助長する暴力行為としての側面が問題視されてきた[Parker 1995, Alves 2004]¹⁰。一方、罵りに特徴的なのが、暴力性それ自体よりも、むしろ、その対象であることは看過されやすい。実は、罵りにおいて、言葉それ自体(シニフィアン)、罵り言葉が意味するもの(シニフィエ)、罵り言葉の発話対象(レファラン)は、必ずしも一致する訳ではない。通常の発話では、例えば、サッカー選手という言葉は、サッカー選手を意味し、サッカー選手に対して発話される。一方、受動的男性同性愛者という罵りは、それが周知の人物に対してのみならず、その罵りに該当しないと想定される人物に対しても発話される。

この点から二つの特徴が導かれる。第一に、罵りには、一見すると呼びかけの失敗が初めから運用規則に織り込まれている点である。罵りでは、通常の発話で想定されるようなシニフィアン、シニフィエ、レファラン間の一致ではなく、その不一致もが想定されている。そしてこの不一致こそが、罵りの効果を生み出している。それはつまり、呼びかけが、本来ならば、罵り言葉で描写された像とは不一致のはずの対象人物が、必死に否定したりすることで、逆に同一性を認めているかのような身振りを生み出す点にあるからだ[高橋 2008: 84-84]。第二に、罵りは、一見すると他者に対する暴力的な侮蔑行為のようだが、実は、「礼節(respeito)」と密接に結びついている点である。娼婦の息子を娼婦の息子と呼ぶなど、罵りの事実性が高い対象人物への呼びかけは、「礼節の欠如(falta de respeito)」と解釈されるのみならず、意図的な行為として悪意を読み込まれることで、両者の関係を悪化させ、惨事を招くことも多い¹¹。結果として、罵りは、罵りを受け流し、冗談として処理可能な関係性を伴う運用ネットワークにおいて交換されると同時に、その運用ネットワークは、罵りの継続的運用を通して確認されてゆく¹²。

2 本物のコルノ

バールが数軒並ぶカショエイラ(cachoeira)市の繁華街で、筆者が隣人のファブリシオ(仮名)と酒を呑んでいると、近所に住む40代の女性、ハイムンダ(仮名)が、彼女よりも10歳ほど年下の夫、ジジコ(仮名)を探しに来た。ジジコは自宅の玄関と通りに面した客室に商品を陳列した雑貨屋をハイムンダと営むが、道路補修やサトウキビの刈り取りなど、単発の副収入で少しまとまった金が入ると、バールの裏手のブレガ(brega)¹³、つまり、売春宿に通うことが、近所の男性たちには知られていた。ジジコの行方を尋ねるハイムンダに対し、ファブリシオが知らないと答えると、ハイムンダはブレガの方角へと消え去った。筆者は毎回わざわざブレガに入ってジジコを家に連れ戻すのかとハイムンダに同情すると、ただでさえ騒々しいバールの中で、ファブリシオは聞き取りにくいほどの小声で次のように言った。「何を言っている、逆だ。ジジコの隣に住むアレマオン(仮名)を知っているだろ。奴がハイムンダを食ったよ。ジジコこそが「本物のコルノ(corno verdadeiro)」なんだよ。黙っているよ。」

コルノは、先述したように、長らく強烈なスティグマを男性に課してきた[Willems 1953, Fonseca 2003]。法的であれ事実上であれ、婚姻関係、もしくは恋愛関係にあるパートナーに対する不貞(adultério)は、一般的には「トライサオン(traição)」、つまり「裏切り」という強い非難の意を込められた言葉で表現される。ただし、不貞をめぐる表現やスティグマは、男女に対して対称的ではない。男性が「不貞を働く(trair)」ときは、文字通り、女性は「不貞を働かれた女性(mulher traída)」となるが、不貞を働かれた事実によってとりたてて否定的な評価や嘲笑が女性に向けられることはない[Fonseca 2000: 131]。そればかりか、彼女に対しては同情が向けられ、ときに独力で子供を育てる気丈さは賞賛に値する[Sarti 1996: 53]。一方、「不貞を働かれた男性(homem traído)」という中立的表現は、日常会話においてまず聞くことがない。女性が不貞を働いたとしたら、男性はもっぱらコルノという侮蔑的な表現を通して嘲笑の話題を提供することになるからだ。

また、コルノは状況描写が付与された表現に発展する。例えば、「コルノ・トリガド(tô ligado)」は、周囲から自分の妻もしくは恋人が不貞を働いていることを度々知らされ、それに対していつも「わかっている(トリガド)」と返答するものの、実際に何の行為も起こさずに見逃している男性である¹⁴。「コルノ・コンヴィンシド(convincido)」もまた、文字通り、女の不貞を「気付いている(コンヴィンシド)」が、しかし、その事実を見て見ぬ振りをしている男性のことだ。「コルノ・セゴ(cego)」は「目の見えない」男性で、一見するとコンヴィンシドの反対だが、見えているはずだがあえて見ない、つまりコンヴィンシドと同じ意味になる。「コルノ・コンソラド(consolado)」は、一度泣いて、苦しみが和らぎ、今は「慰めを得て(コンソラド)」、不貞の事実を受け入れた男性である。「コルノ・ブラボ(bravo)」は、不貞の事実「怒り狂っている(ブラボ)」が、しかし、不貞相手や女性に対しても何もできない男性である。雨が滴り落ちる場所、つまり「ゴテイラ(goteira)」で、「リカルダオン(Ricardão)」(女性の不貞相手)が去っていくのを辛抱強く待つ、「コルノ・デ・ゴテイラ」というものもある¹⁵。これらの表現からは、コルノに対する最も侮蔑的な眼差しが、コルノになっている状況以上に、その状況を知っていながら、解決する方策を何らとらない(もしくは、とれない)男性に向けられていることがわかる。

コルノという罵りは、「昼から呑んでいるのかい、このコルノ」のように対面上においても、または「バイクを貸してやったが、あのコルノはまだ返してこない」といったように第三者へも発話され、他の罵りと同じ運用規則が適用される。ただし、他の罵りと決定的かつ根源的な差異が、発話対象者と罵り言葉の関係において存在する。前節で先述したように、罵り言葉は、呼びかけの失敗が予め織り込まれて発話される。しかし、男性にとって、妻や恋人の不貞によってコルノに貶められる危険性は日常的なものである。当然のことながら、自分が他人の妻や恋人を寝とる可能性の分だけ、他の男性によって自分の妻や恋人を寝取られる可能性がある。コルノになるのではないかという不安は決してなくなることはないのである。ゆえに、コルノの罵りは、まさにコルノである当該者に対して図らずも発話をしてしまい、呼びかけの予期せぬ成功をもたらす結果、織り込まれた失敗自体が頓挫し、罵り言葉の運用規則を侵犯する可能性を高めてしまう。コルノへと変貌する偶発性は、誰か他の男性にだけでなく、まさに発話者自身にも生じうるのである。

もちろん、強烈なスティグマを伴う発話内容を事実として引き受け、それに同一化すること、つまり、「本物のコルノ」であることをわざわざ公言し、嘲笑と好奇の眼差しに自ら進んで晒しに行く男性の姿は想像

し難い。したがって、コルノの罵りに対する最善で唯一の返答方法とは、Claudia Fonsecaも指摘する通り、口を閉ざすことだ[Fonseca 2000: 146]。この沈黙は、事実無根の罵り、つまり運用規則に従った罵りに対する聞き流しや無反応との見分けが困難であり、コルノの罵りはたとえ当事者に向けられたとしても、その事実を知りうる人物がはやし立てない限り、他の罵りと見た目は変わらない。

ただし、コルノであるとの事実を公表する空間が全くないと言え、そうではない。コルノへの同一化を積極的、かつ不可避的に公表せざるをえない状況は、確かにある。それは、自己をまさにコルノへと陥れた、妻もしくは恋人との直接的な対面状況である。男性は女性に対し、「お前が先に不貞を働いたのだから、俺も不貞を働いてやった」と報復として自己の不貞を正当化したり、あるいは、「不貞ばかり働いているから、振ってやる(largar-se)」と関係の終焉をちらつかせたりする。男性は女性の不貞に言及しつつ、不貞を働かれたという経験を復讐としての不貞や性愛関係の終焉を実行する契機と読み替えることで、コントロールする側としての地位を回復する¹⁶。この状況において不貞を働かれた男性の経験は、その事実の公表を通して女性との交渉を有利に進めるために利用される、数少ない手持ちの選択肢へと変貌する¹⁷。

付言すれば、こうしたコルノの公表は、昔からあるようだ。例えば、18世紀のヘコンカヴォにあった、ある製糖工場の経営者の妻が、夫に不貞を咎められたという裁判記録が残っている[Del Piore 2005]。頻繁にサルヴァドルへと出かけて家を留守にする夫の目を盗んでは、不貞相手であったサルヴァドルの高位のカトリック司祭を夜中に迎え入れていたというのだ。結局、夫に現場を取り押さえられ、司祭は裁判所から賠償金の支払いを命じられ、別都市へと左遷されている。裁判では、男性は積極的に妻の不貞を認めざるをえない[ibid.: 60]。

確かに、女性による不逞の立証は女性との別離交渉を有利に進めるために、不貞を捏造している可能性も否定できない。1960年代のバイア州内陸部のある小都市での別離を求めたある裁判では、夫側からの別離申し立ても、妻側からの申し立ても、ともに自己に有利な判決を勝ち取るために、婚姻生活の崩壊を相手の責任として、特にお互いの不貞をその主要原因と指摘している[Vasconcelos 2002]。裁判資料からは、夫に有利な判決を勝ち取るために、夫側の弁護士が、不貞を働かれたという不名誉を公にしながらも、婚姻生活の崩壊に対して妻の不貞が先行していたことの立証を試みていることが伺える。

その一方で、女性の不貞は歴史的事実としてしばしば起こっていたとの指摘もある。Maria Beatriz Nizza da Silvaは、上流階級では不貞を犯罪と捉え、不貞を働いた妻を殺害する名誉殺人が女性の不貞を抑止していたものの、女性の不貞を犯罪とみなす倫理性は決して一般的ではなく、女性の自発的な不貞も頻発していたことを明らかにしている[Silva 1984: 195-196]。

IV 考察

第Ⅲ章1節では、コルノに代表される罵り言葉の分析を通して、「男らしさ」について、マチスモのような男性の主体、希求すべき性的アイデンティティ、その両者が結びつく場や状況を貫通する一点などなく、むしろそうした「男らしさ」のような「中心を欠いた空虚な場所」として捉え直した。コルノは、その周囲

で否定的に「男らしさ」を構成してきた(と同時に、たびたびそれに失敗してきた)。一方、デモ行進を報じた『マッサ』でのコルノたちは、自らがコルノであることを公表し、その事実を偏見や差別なく受け入れる社会の実現を求めている。それはつまり、「男らしさ」を否定すると同時に、それゆえに編成もしてきたコルノに対するスティグマが、男性の性的アイデンティティを脅かさない程度に希薄になってきた事実を示すように見える。

このコルノの運用方法の変容は、一見すると、男女双方の性規範の弱体化という大きな変容の中に位置づけ、その一部として理解することが可能かもしれない。従来、保守的とされてきたバイアのような地方でさえ、女性の身だしなみは、素肌を露出させ、身体シルエットを強調した服装に取って代わってきた。「謂れは男性だけではなく、女性にもあるのだ」というのが、開放的になった女性に魅了される男性たちの言い分である[McCallum 1998: 281]。さらには、娼婦というスティグマが希薄になることで、女性は恋愛関係へと積極的に誘う(コントロールする)役回りさえ引き受け始めている[Correio da Bahia 2004]。性規範の弱体化によって獲得した性的自由を謳歌し、複数男性との性愛や、男性の不貞に対する復讐の不貞さえ働くのである[Gregg 2006]。コルノにならないための身振りはますます困難になっており、コルノという否定性によって編成されてきた「男らしさ」のあり方もまた、変容しつつあるように思える。

その一方で、第Ⅲ章2節で示したのは、コルノを公表する場面や社会空間は、これまでも存在してきたということであった。フィールドワークでのデータと歴史研究に突き合わせると、この「男らしさ」の変容は、コルノのスティグマの希薄化ではなく、むしろその誹りを拒否すべき社会空間の変容に見える。『マッサ』の記事からは、参加者が非匿名で具体的な社会空間、つまり、友人や隣人たちのネットワークの中で、コルノである事実を引き受けているのかどうかは、定かではない。確かに、コルノの公表空間は拡大しているが、それはつまり、否定的具体像としてのコルノが無効化した訳ではないのではないのか。

また、そもそも「コルノ」は「男らしさ」を否定的に編成する代表的な具体像であるものの、あくまでその一つである。であるならば、「男らしさ」の変容を捉えるためには、コルノの公表空間の変容が他の否定的男性像と、どのような関係にあるのかを考察する必要がある。受動的男性同性愛者を取り上げてみよう。先述したコルノ以外の他の二つの否定的男性像の中でも、とりわけ受動的男性同性愛者は、コルノと同様に、直接的に「男らしさ」を否定する具体像である。ブラジルの最大都市サンパウロでは、世界最大規模のゲイパレードが毎年開催され、多様な性愛のあり方に対する承認運動が展開されている。2011年5月には、連邦最高裁判所によって、相続などの家族の権利が同性パートナー間でも認定され、2013年5月には、国家司法審議会によって同性婚が認可された。確かに、コルノと同様に、受動的男性同性愛者をめぐる公表空間は拡大しているように見える。

一方で、アイデンティティの引き受けという観点から、両者には、大きな違いがあることも見逃してはならない。コルノは、先述した通り、誰にでも起こりうる不貞によって誰でもなりうるという普遍性を特徴とする。それに対して、受動的男性同性愛者は、誰でもそうなる可能性として語られてはいない。受動的男性同性愛者自身と、彼らに対する「賛同者」は同じではないのである。異なる性的志向や性的アイデンティティの承認を求める運動において見られるように、それは普遍性とは別の、差異の政治に属している。確かに、コルノと受動的男性同性愛者は、「男らしさ」に対する否定的具体像としては等価に見える。しかし、このようにアイデンティティの引き受け方が大きく異なる以上、「男らしさ」に対する関係もまた異

なり、そしてまた「男らしさ」の変容の下で一括りにできない、異なる分析が要請されるのである。

こうして否定的具体像としてのコルノが無効化したのではなく、また、他の否定像がコルノとは別の論理で「男らしさ」を編成し続けている以上、「男らしさ」の否定的編成のあり方が大きく組み替えられた訳ではないと言えるだろう。逆に言えば、正しい「男らしさ」を実定的に提示することは、想像以上に困難なのではないか。ここで参照したいのは、再び Lacan の影響を受けた議論、とりわけ Slavoj Žižek によるアイデンティティが抱え込む二重の不可能性をめぐる議論である。Lacan の主体理論を参照しながら、Ernesto Laclau は、集団のアイデンティティは他者との関係性の中で常に決定不可能性を抱え込んでいることを指摘している。Žižek は、この「アイデンティティの不可能性」に対して、もう一つの不可能性こそが、重要かつ不可避であるとして、Laclau の議論を発展させている。Žižek が強調するのは、Laclau が指摘するように「社会」の十全な実現が不可能だけでなく、その不可能性自体を正しく表現することもまた不可能なことである。それゆえに、後者の不可能性を隠蔽しようとして、歪曲された像が社会的に召喚されてしまう[ジジェク 2002: 136-137]。

集団や社会を、男性に置き換えてみよう。娼婦の息子、受動的同性愛者、コルノは、歪曲された像ではないだろうか。Žižek の議論は、集団のアイデンティティ形成において、こうした歪曲化が不可避であることに踏み込んだものである。その議論を敷衍すれば、ブラジルの「男らしさ」においても、否定的な具体像を無効化するのが困難であるばかりか、特定の像が強化されたり、新たな像が出現したりする可能性すらあるはずだ。「男らしさ」の変容を議論する中で、「男らしさ」は常に既にあるものとして、たとえ虚構であるとしても、実定的に語られる傾向がある。しかし、このように「男らしさ」が否定的に編成されているのであれば、その変容のあり方それ自体もまた丁寧に問い直す必要があるだろう。

V 結論

本論はコルノである事実を自ら公表するようになったという「男らしさ」の変容をめぐって、コルノとは何か、ブラジルにおける「男らしさ」のあり方とはどのようなものかを論じてきた。その結果、近年の「男らしさ」の変容は、コルノの公表空間の変容であることを明らかにし、コルノ以外の否定的具体像、つまり娼婦の息子、受動的男性同性愛者が、今後どのような変容を蒙るのかを検討する必要があると指摘した。これらを踏まえて、「男らしさ」の変容について、その変容に目を奪われて、単線的な歴史物語として見るべきではないというのが本論の主張である。この主張を導いた本稿は、変容の中で、「変容しないもの」、それはつまり、「男らしさ」に対する否定的具体像と、それによって編成される「中心なき空虚な場所」としての「男らしさ」を問い続けてきた。

20 世末から 21 世紀にかけて、ブラジルは、軍事政権後のいわゆる「(再)民主化」、長引く経済不況後の中産階級の勃興と経済格差の縮小という、政治経済の歴史的変遷を経験してきた。確かに、こうした政治や経済の領域においては、国家を中心とするパラダイムの変容と継承が明確な転換点をもって描くことができるかもしれない。しかし、「男らしさ」は、その変容主体や継承主体が単一人でも組織でもない。「男らしさ」は、それを文化と呼ぶにしろ呼ばないにしろ、人々の間の非匿名で具体的な社会空間でのやり取りにおいて、明確な転換点もなく、日々生起しているのである。

¹ ブラジルの奴隷貿易の主要港は、サルヴァドル、リオデジャネイロ、レシフェであった。エモリー大学などが作成した「環大西洋奴隷貿易データベース(The Trans-Atlantic Slave Trade Database)」によれば、ブラジル奴隷貿易の歴史において、バイア(サルヴァドル)に 1207,735 人、リオデジャネイロに 1100,570 人、ペルナンブコ(レシフェ)に 416,632 人がアフリカ諸地域から輸送されている。そのうち 1808 年から 1866 年、リオデジャネイロ遷都後しばらくたった時代でも、リオデジャネイロの 710,134 人には及ばないものの、バイアには 319,931 人が連行されている。

² 筆者のフィールドワークにおいては、同様の意味を持つ表現は、カンドンブレなどアフリカ系宗教の蔑称であるマクンバ(macumba)を使った「マクンバ女の息子(filho da macumbeira)」やアフリカ系宗教の一つ、ウンバンダ(umbanda)の精霊である「トランカ・ファ(tranca rua)」を一度ずつ耳にしたぐらいであったが、José Eustáquio Diniz Alves は、「雌馬の息子(filho de égua)」、「(独身)女性の息子(filho de uma mãe (solteira))」、「お前を産んだ娼婦、もしくは娼婦が産んだ奴(puta que o pariu)」といった表現も挙げている[Alves 2004: 29]。

³ ヘコンカヴォでは、子供が生まれると、実際の両親とは別に代父母(padrinho もしくは madrinha)を立てることが多い。代父母は洗礼に立会うのみならず、必要な経済援助も行うが、経済援助の側面は形骸化してきている。このように家族が拡張する側面があると同時に、その構成員は細かく識別されている。例えば、妻の父母は、義理の父母ではなく、「ソグロ(sogro)もしくはソグラ(sogra)」、兄弟姉妹の結婚相手は義理の兄弟姉妹ではなく、「クニャド(cunhado)もしくはクニャダ(cunhada)」という独自の呼称を用い、直系親族の用語と混同しない。また、物心ついた後に生みの父と別離した子供は、実父である「パイ(pai)」と継父の「パドラスト(padrasto)」を混同せずに呼び分ける。

⁴ 字義通り訳せば「受動的男性」であるが、もっぱら性行為に媒介された男性同士の関係性を示すゆえに、本稿では受動的男性同性愛者と表記する。

⁵ もちろん、すべての男性同性愛者が、実際には受動的男性同性愛者として肛門性交を実践している訳ではない。しかし、同性愛者に纏わりついた受動性の堅牢なイメージは、この事実をもって決して覆されることはない。一方、受動的男性同性愛者のパートナー、しばしば「ボフェ(bofé)」と呼ばれる「男性に挿入する男性」は、受動的男性同性愛者の強力なスティグマに遮光され、しばしば「男らしさ」の地位を喪失せずに済む。この事実は、男性/女性の編成が生物学的身体のみならず性行為における行為性によって規定されるゆえに生起する両者のズレに起因する[高橋 2008]。

⁶ 語彙の詳細については、次を参照されたい[Dynes 1995, 高橋 2008]。

⁷ もっともらしい由来は、ギリシャ神話に登場するミノタウロスである。クレタ島のミノス王は、一頭の牛を気に入っていたが、王妃のパーシパエーもまたその牛に魅了され、牛との間に子を産む。半人半獣のミノタウロスである。つまり、ミノス王は、角を持った牛によって、妻に不貞を働かれた男性となっている。一方、角は妻や恋人の不貞相手とは別のものを指しているとの解釈もある。例えば、Julian A. Pitt-Rivers は、「雄山羊(cabron)」という男性の性欲の象徴が、スペインのアンダルシア地方において他人の妻や恋人と不貞を働いた男性ではなく、不貞を働かれた男性を表すという、語義の転倒を指摘する[ピット=リバーズ 1980: 138-139]。同地方において「男らしさ」は、睾丸の所有に帰せられており、スペイン語のコルノ、「クエルノ(cuerno)」は、去勢によって柔順になった雄牛のように、「男らしさ」を喪失した男性の意になる[ピット=リバーズ 1980: 107-109]。つまり、角は「去勢された男性」と解釈でき、不貞を働かれた男性となる。

⁸ モデルの反転自体は、男女ともに発話する罵り、例えば、「ローコ(louco)」、「マルーコ(maluco)」、「ドイド(doido)」といった狂気的狀態、仕事や学校にも行かずにふらつき歩いている「浮浪人(vagabundo)」、手の施しようのない「酔っ払い(bebo)もしくは(bebado)」などにも共通する。これらの罵りの射程が自己のコントロールの欠如であるのに対する一方、男性同士の罵り言葉の特徴は、自明性なき自己(男性)ではなく、非男性に対するコントロールの欠如、もしくは非男性によってコントロールされる自己が焦点となっていることだ。

⁹ これらの三つの罵り言葉は、これまで「男らしさ」に関心をもつ研究者にとって特別な注意が払われてきた。例えば、Richard Parker はゲイといったより対称的な関係を想定する性愛関係に基づく同性愛概念が、能動性/受動性という非対称的行為に基づくブラジルの同性愛概念に対して近年影響を及ぼしていることを強調しつつ、後者の概念のスティグマをめぐる詳細な分析を行っている[Parker 1995]。

Parry Scott は男性にとって最も辛らつで暴力的な侮辱が、女性に対するコントロールの欠如、もしくはコントロールされていない身内の女性であり、前者がコルノ、後者が娼婦の息子として言語化されていると指摘する[Scott 1996: 292]。Alves も男性に対する卑猥で汚い言葉の代表として受動的同性愛者と娼婦の息子を挙げている[Alves 2004: 28-29]。しかしながら、これらの研究は罵りが特徴的な実践であることを認めつつも、言葉の個別的な意味とそこで顕在化する男性中心主義や同性愛蔑視の再生産をめぐる議論に留まり、罵り言葉を総体として捉えたり、罵りを実践する文脈や運用方法を明らかにしたりすることはなかった。

¹⁰ 男性同性愛をめぐる罵り言葉は、ブラジルに限らずラテンアメリカで幅広くみられるが、ブラジルと同様に、その分析や議論は権力論批判に終始する傾向がある[上村 2013]。

¹¹ 他にも医者、市議会議員、警察官といった身分が高く礼節をもって接するべき人物への運用も控えられている。ゆえに、罵りは、礼節を欠如しているというよりも、むしろそれが周到に組み込まれた実践である。礼節は、Roberto da Matta の著名な国民性論において指摘されるように、ブラジルにおける重要な社会的態度である[Matta 1991]。Matta は、独立記念日の軍事パレード、カルナヴァル、カトリック教会の行進で構成される三幅対を社会関係のモデルとして取り上げ、軍事パレードを「再強化」、カルナヴァルを「融解」、そして行進を「中性化」と捉え、それぞれ「礼節」、「冗談」、「忌避」という儀礼的社会関係に翻訳している[ibid.: 26-60, 207-217]。もちろん、Matta 自身が注意を促すとおり、こうした分類は、あくまでモデルであり、実際には、罵りのような 1 つの実践に複数の社会関係が組み込まれている[ibid.: 26]。しかし、その経験的事実が、カルナヴァルの無秩序性、軍政による圧倒的な国家権力、あるいは奴隷制を色濃く残す人種や階級など、ブラジルを描出するための参照点の複雑な重なり合いに注意を促す Matta の洞察力を減ずることはない。

¹² 罵りの運用ネットワークは、そこから家族や知人の女が完全に排除されることはないものの、しかし、基本的には隣人(vizinho)、友人(amigo)、仲間や同僚(colega もしくは camarada)といった男性同士の関係にそって形成されている。男性同士によって、「男らしさ」の外部性が、ヴィアドやビシヤといった罵り言葉が意味する受動的男性同性愛者に投影されている点で、罵りの運用ネットワークは、Eve Kosofsky Sedgwick の言う男性同士の絆、つまり「同性間連帯」と「同性愛嫌悪」を併せ持つ「ホモソーシャルな関係」に類比しうる[セジウィック 2001]。「男性を愛する男性」と「男性の利益を促進する男性」は切れ目なき連続体を形成するにもかかわらず、Sedgwick によれば、強制的異性愛が組み込まれることで、男性同士の絆においては完全に断絶しているという[ibid.: 4]。このような男性同士の絆は、ホモセクシュアルな関係の禁止によって「男性の利益を促進する男性」たちによる「ホモソーシャルな関係」のみを承認すると同時に、女性を欲望対象に貶める。一見すると 1 人の女性の所有をめぐる奪い合いは、男性同士の「ホモソーシャルな欲望を満たすために女性を利用する」ことであり、「異性愛関係をもつのは、男性同士が究極的な絆を結ぶため」となる[ibid.: 75-76]。

¹³ 民家をそのまま使用していることが多く、居間空間は娼婦と客が交渉するバルになり、個室は性行為及び娼婦の寝室となる。娼婦が踊る空間を併設したボアッチ(boate もしくは boite)というブラジルで広く使用される名称は、バイアにおいては職業娼婦との交渉の場ではなく、踊る空間と出会い機会を提供するディスコ(discooteca)の意味で用いられる。

¹⁴ ト・リガドは「繋がっている」との意味から転じて、知っている、わかっているという意味で、肯定文としても疑問文としても日常会話で頻繁に使用される北東部の表現である。

¹⁵ また、コルノは、不貞を働かれた男性のみならず、そもそも女性との性愛関係を取り結びたくても、取り結べていない男性の意味にもなる。例えば、コルノ・ランシ(corno lanche)は、女性に軽食(ランシ)を提供するだけで、性愛関係は他の男性に占有されている男性である。コルノ・ケイロス(Queirós)は、ケイロスという人名の由来は不明だが、女性の知り合いがたくさんいるものの、性愛関係には発展できず、結果として他の男性にとっては、女性を紹介してくれる便利な男性になってしまう。

¹⁶ 女性や第三者を納得させるための、女性の不貞の事実を支持する根拠に欠くことも多く、確かに、男性の戦略的な言い掛りに思えるかもしれない。しかし、不貞という事実の流用を、単純な言い掛りと判断するのは容易ではない。不貞をめぐる事実と非事実の間は、飛び交う「噂」や「誤解」に埋め尽くされているからだ[ギルモア 1998; Fonseca 2000]。

¹⁷ もちろん、他の有力な選択肢は暴力である。ただし、多くの女性は男性の暴力を耐え忍ぶことなく、やり返す。

参考文献

Alves, José Eustáquio Diniz

2004 *A linguagem e as representações da masculinidade*. Rio de Janeiro: IBGE.

Amado Jorge

1943 *Terras do sem fim*. São Paulo: Livraria Martins.

コンネル、ロバート・W

1993[1987] 『ジェンダーと権力:セクシュアリティの社会学』(森重雄・菊池栄治・加藤隆雄・越智康詞・訳)、東京:三交社。

Correio da Bahia

2004 “A perigete chegou.” (25 de fevereiro), p.B-1.

Del Piore, Mary

2005 *História do amor no Brasil*. São Paulo: Editora Contexto.

Dynes, Wayne R.

1995 “Portugayese.” In *Latin American Male Homosexualities*. Murray, Stephen O.(ed.),Albuquerque: University of New Mexico Press, pp.256-263.

Fonseca, Claudia

2000 *Família, fofoca e honra.: etnografia de relações de gênero e violência em grupos populares*. Porto Alegre: Editora UFRGS.

2003 “Philanderers, Cuckolds, and Wily Women: Reexamining Gender Relations in a Brazilian Working-Class Neighborhood.” In *Changing Men and Masculinities in Latin America*.Guttman, Matthew C. (ed.), Durham: Duke University Press, pp.61-83.

ギルモア、デイヴィッド

1998[1987] 『攻撃の人類学:ことば・まなざし・セクシュアリティ』(芝紘子・訳)、東京:藤原書店。

Gregg, Jessica

2006 ““He Can Be Sad Like That: Liberdade & the Absence of Romantic Love in a Brazilian Shantytown.”” In *Modern Loves: The Anthropology of Romantic Courtship & Companionate Marriage*. Ann Arbor: University of Michigan Press, pp.157-173.

IBGE

2008 *Pesquisa nacional por amostra de domicílios: síntese de indicadores 2008*. Rio de Janeiro: IBGE.

2010 *Censo demográfico 2010: características gerais da população, religião e pessoas com deficiência*. Rio de Janeiro: IBGE.

クリステヴァ、ジュリア

1986[1977] 『ポリローグ』(赤羽研三他・訳)、東京:白水社。

Kulick, Don

- 1998 *Travesti: Sex, Gender, and Culture among Brazilian Transgendered Prostitutes*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Massa!
- 2011 “Cornos Felizes.” (19 de dezembro), p.7.
- Matta, Roberto da
- 1991[1979] *Carnivals, Rogues, and Heroes: A Interpretation of the Brazilian Dilemma*. John Drury(trans.), Notre Dame: University of Notre Dame Press.
- McCallum, Cecilia
- 1998 “Restraining Women: Gender, Sexuality and Modernity in Salvador da Bahia.” *Bulletin of Latin American Research* 18(3): 275-293.
- Parker, Richard
- 1991 *Bodies, Pleasures, and Passions: Sexual Culture in Contemporary Brazil*. Boston: Beacon Press.
- 1995 “Changing Brazilian Constructions of Homosexuality.” In *Latin American Male Homosexualities*. Murray, Stephen O. (ed.), Albuquerque: University of New Mexico Press, pp.241-255.
- ピット=リバーズ、J・A
- 1980[1954] 『シエラの人びと：アンダルシアの民俗誌』（野村雅一・訳）、東京：弘文堂。
- Rebhun, Linda-Anne
- 1999 *The Heart Is Unknown Country: Love in the Changing Economy of Northeast Brazil*. Stanford: Stanford University Press.
- Sarti, Cynthia Andersen
- 1996 *A família como espelho: um estudo sobre a moral dos pobres*. Campinas: Editora Autores Associados.
- Scott, Parry
- 1996 “Matrifocal Males: Gender, Perception and Experience of the Domestic Domain in Brazil.” In *Gender, Kinship, Power: An Interdisciplinary and Comparative History*. Maynes, Mary Jo et al. (eds.), New York: Routledge, pp.287-301.
- Secretaria de Assuntos Estratégicos de Presidência da República
- n.d. <http://www.sae.gov.br/site/?p=6955> (2014年12月8日閲覧)
- セジウイック、イヴ・K
- 2001[1985] 『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（上原早苗・亀澤美由紀・訳）、名古屋：名古屋大学出版会。
- Silva, Maria Beatriz Nizza da
- 1984 *Sistema de casamento no Brasil colonial*. São Paulo: EDUSP.
- 高橋慶介

- 2008 「罵りの文化:ブラジル北東部バイーア州ヘコンカヴォ地域における男性性とその二重性」『イベロアメリカ研究』30(2): 81-89。

The Trans-Atlantic Slave Trade Database

n.d. <http://www.slavevoyages.org/tast/index.faces> (2014年12月8日閲覧)

上村淳志

- 2013 「アルブール論再考:現代メキシコのゲイ・アイデンティティを持つ者にとっての機能」『イベロアメリカ研究』35(1): 69-85。

Vasconcelos, Vânia Nara Pereira

- 2002 “Mulheres honestas, mulheres faladas: casamentos e papéis sociais.” In *Imagens da mulher na cultura contemporânea*. Ferreira, Silvia Lucia e Enilde Rosendo do Nascimento (orgs.), Salvador: FFCH/UFBA, pp.201-219.

Willems, Emilio

- 1953 “The Structure of the Brazilian Family.” *Social Forces* 31(4): 339-345.

ジジエク、スラヴォイ

- 1996[1994] 『快樂の転移』(松浦俊輔・小野木明恵・訳)、東京:青土社。
2002[2000] 「階級闘争か、ポストモダニズムか? ええ、いただきます!」『偶発性・ヘゲモニー・普遍性:新しい対抗政治への対話』(竹村和子・村山敏勝・訳)、東京:青土社、バトラー、ジュディス、エルネスト・ラクラウ、スラヴォイ・ジジエク、p.123-181。